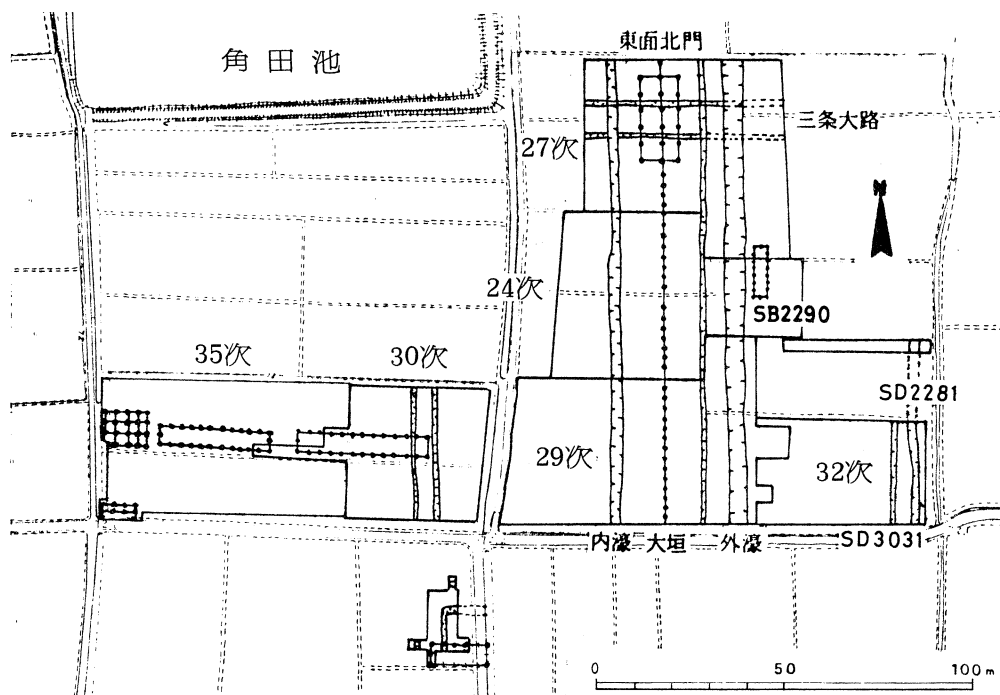


藤原宮東面大垣地域の調査（第32次）

（昭和56年1月～昭和56年4月）

この調査は東面大垣地域を対象とした一連の調査であり，外濠東方に広がる藤原宮の外周帯の状況を解明する目的で実施したものである。調査地は第29次調査区に東接している。昭和53年度の第24次調査では今回の調査地の北18mの位置に東西に長い発掘区を設け，東二坊大路の西側溝と思われるSD 2281を検出している（概報9）。調査区は南北26m，東西48mの範囲で，一部は第29次調査区と重複する。基本的な層序は上から耕土，床土，灰褐色土，褐色砂質土，暗褐色砂質土，黄褐色粘土（地山）の順である。このうち灰褐色土層は中世以降の堆積土であり，褐色砂質土と暗褐色砂質土層は地山面の低い中央部にのみみられる土層で，藤原宮造営前の整地層と考えられる。褐色砂質土層が0.2m，暗褐色砂質土層は0.1mの厚さで，中央部で最も厚くなり両層を合わせて0.35m



藤原宮東面北門調査位置図（1：2000）

ある。遺構の検出は各層位ごとで行ったが、中央部は整地層上面から掘り込んだ遺構を保護するために、地山面での遺構検出は小範囲にとどめた。

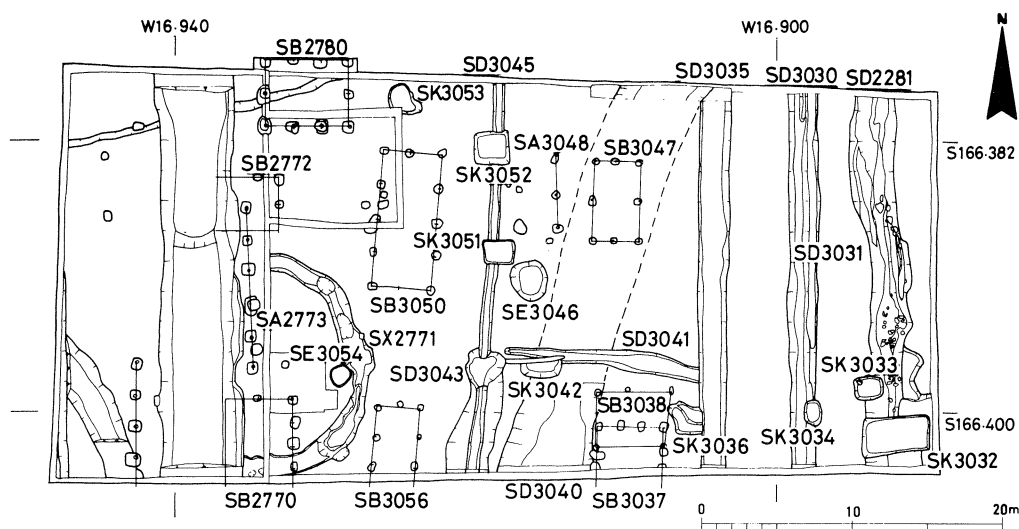
検出した遺構は、古墳時代前期、7世紀、藤原宮期、藤原宮以降の各期に及んでいる。以下、この大別に従って記述する。

藤原宮期の遺構 溝 S D 2281・3031, 土壇 S K 3036・3042・3053 がある。

溝 S D 2281は調査区の東端で検出した南北溝で、幅 3.0m、深さは 0.6m である。わずかに蛇行して南北に延びる。東岸寄りを中心に径 30cm ほどの河原石が集中し、本来は石組で護岸していた可能性もある。堆積土からは土師器、須恵器、軒平瓦、帯金具とともに平安時代の黒色土器が出土しており、10世紀まで存続していたことがわかる。S D 3031は S D 2281の西 6m にある幅 1.5m、深さ 0.2m の素掘りの南北溝で、溝内には灰色粗砂が堆積していた。後述の 7 世紀の溝 S D 3030 と重複しており、S D 3030 を埋めた後に新たに掘られた溝である。土壇 S K 3036は調査区の中央の南部にある径 2.0m、深さ 0.2m の不整形な土壇で、後述の南北溝 S D 3035 より新しい。埋土には炭化物が多く含まれ、土師器、須恵器が出土した。S K 3042は S K 3036の西にある東西 2.5m、南北 1.0m の不整形の土壇で、深さは 0.2m。東西溝 S D 3041より新しい。S K 3053は調査区の北西部にある径約 2m の不整円形の浅い土壇である。埋土から土師器、須恵器、瓦が少量出土している。

7 世紀の遺構 整地層との関係や出土遺物、建物方位によって、7 世紀中葉の I 期と、7 世紀後半の II 期とに分けられる。

I 期の建物には、掘立柱建物 S B 3050・3056, 溝 S D 3030・3035・3045, 井戸 S E 3054 がある。掘立柱建物 S B 3050 は梁行 2 間、桁行 4 間の南北棟で、柱穴の一部は第 29 次調査で検出している。建物方位は北で東に約 4°振れる。柱間寸法は梁行 2.1m 等間、桁行 2.3m 等間である。柱掘形は方 0.6m で、南妻の柱穴は検出できなかった。S B 3056は S B 3050の南 8m にある梁行 2 間、桁行 2 間以上の南北棟で、柱間寸法は梁行 1.5m 等間、桁行 2.1m 等間である。柱掘形は方 0.4m で、東側柱列を S B 3050 の東側柱列に揃えている。S D 3030は S D 3031 と重複する幅 1.4m、深さ 0.4m の素掘りの南北溝である。堆積土は大き



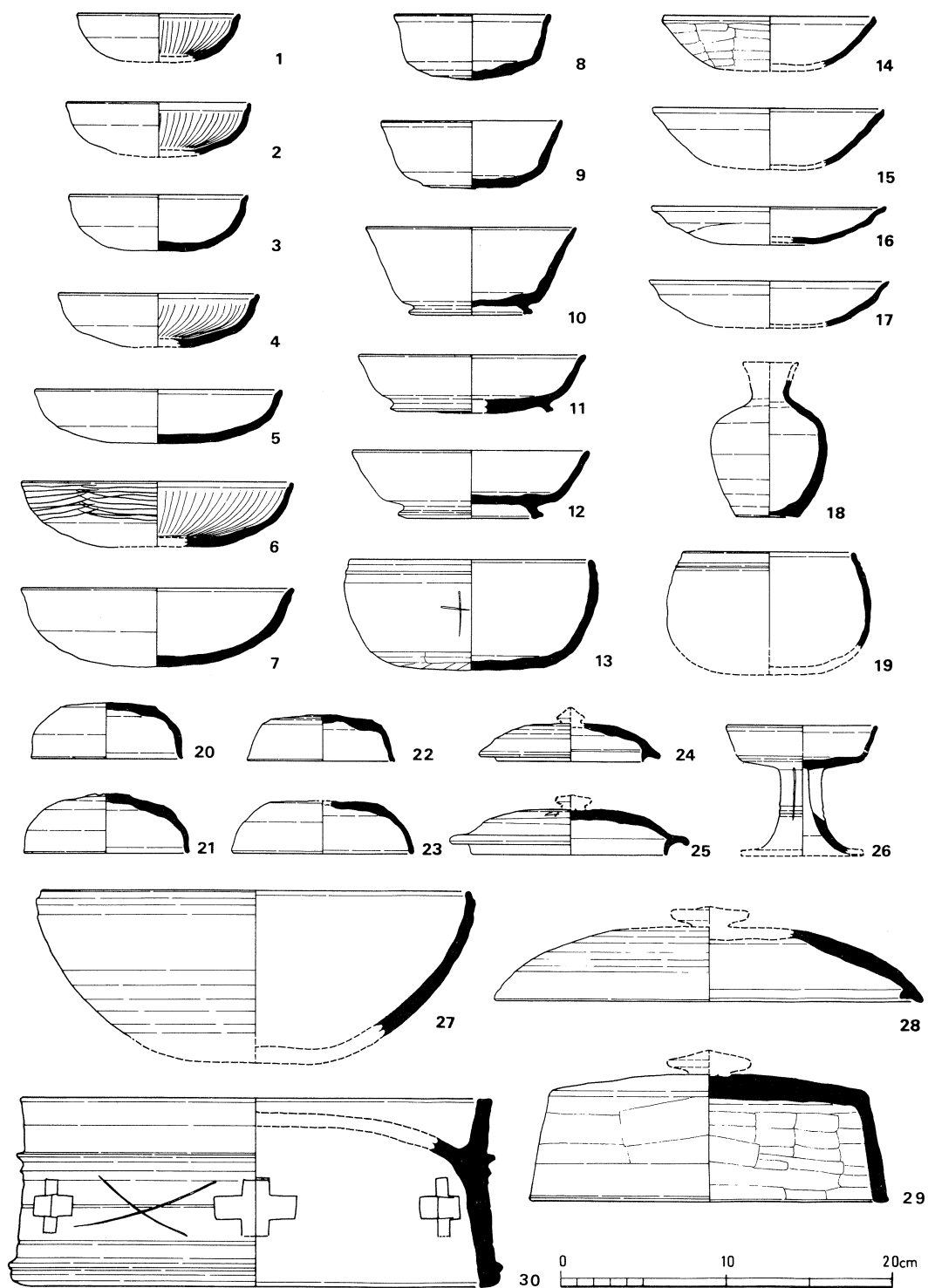
第32次調査遺構配置図（1：500）

く4層に分かれ、上層の黄色土層は藤原宮造宮前の整地層である。SD3035はSD3030の西5mにある幅1.7m、深さ0.3mの素掘りの南北溝で、溝底には薄く砂が堆積する。溝内から7世紀第Ⅲ四半期の土器が出土している。SD3045はSB3050・3056の東3mにある幅1.0m、深さ0.3mの素掘りの南北溝で、北で東に約4°振れ、SB3050・3056と平行する。溝内から7世紀第Ⅲ四半期の土器が出土している。井戸SE3054はSB3056の西北にある円形の井戸で、掘形は径1.5m、深さ1.6m。径約0.6mの円筒状の井戸枠があったとみられるが、枠は遺存しない。I期の遺構にはSB3050・3056、SD3045のように北で東に約4°振れる方位を示す遺構と、SD3030・3035のように真北に近い方位を示す遺構とがあり、さらに細分できる可能性がある。SD3045出土土器は他と比べて古い様相のものが多く、前者が一時期古いことを示唆する。

7世紀後半のⅡ期の遺構には、地山面で検出した掘立柱建物SB2770・2772・2780、掘立柱塀SA2773と、整地層上面で検出した掘立柱建物SB3037・3038・3047、掘立柱塀SA3048、溝SD3041・3043、井戸SE3046がある。SB2770は調査区の西南部にある梁行2間、桁行3間以上の南北棟で、柱間寸法は、梁行約2.1m、桁行約1.6m等間である。真北に近い方位を示す。SB2780は調査区の北西部にある、梁行2間、桁行3間の東西棟である。柱

間寸法は梁行 2.1 m 等間、桁行 1.8 m 等間で、掘形の底に礎板を残すものがある。柱掘形は方 0.8 m である。S B 2772 は南北 2 間、東西 2 間以上の東西棟と考えられる。藤原宮の外濠で西半部が壊されている。S A 2773 は第 29 次調査で検出しており、今回の調査で南北 5 間にまとまった。柱間寸法は 2.1 m 等間。北で西へ約 2° 振れる方位を示す。S B 3047 は調査区の中央にある梁行 2 間、桁行 2 間の南北棟で、柱根が残っている。柱間寸法は梁行 1.5 m 等間、桁行 2.7 m 等間である。柱掘形は方 0.4 m、深さ 0.6 m である。S A 3048 は S B 3047 の西 3 m にある南北 2 間の掘立柱塀である。北端の柱掘形には柱根が残っている。S B 3047 と一連の塀とみられるが、方位がわずかに異なる点で問題が残る。S B 3037 は S B 3047 の南にある梁行 3 間、桁行 2 間以上の南北棟である。柱間寸法は梁行、桁行ともに 1.5 m 等間である。S B 3037 と重複する S B 3038 は東西・南北ともに 1 間で、柱穴の重複関係から S B 3037 より古い。柱間寸法は東西 4.8 m、南北 3.6 m である。S D 3041 は S B 3037 の北にある幅 1.0 m の素掘りの東西溝である。深さは深い所で 0.2 m で、13 m 分を検出した。重複関係からみて土壌 S K 3042 よりも古く、南北溝 S D 3035 より新しい。溝内から 7 世紀第 IV 四半期の土器が出土した。S D 3043 は S D 3041 の西にある幅 3 m の南北溝である。深さは 0.2 m。北端部の径 3 m ほどの範囲は 0.3 m とやや深くなり、この部分の埋土には炭化物が多く含まれる。S D 3045 と重複し、S D 3045 よりも新しい。S D 3041 と一連の溝の可能性がある。溝内から 7 世紀第 IV 四半期の土器と大型の円面硯が出土している。井戸 S E 3046 は S B 3047 の西にある径 2.5 m、深さ 1.6 m の隅丸方形の井戸である。埋土は 5 層に分かれる。最上層は井戸を埋めた厚さ 0.1 m の整地土であり、その下には炭化物を多く含む層が 0.2 m ほど堆積しており、S D 3043 の埋土と類似している。出土遺物は少なく、7 世紀後半の土器と獣骨が出土している。

藤原宮以降の遺構 土壌 S K 3032・3033・3034・3051・3052 がある。S K 3032・3033・3034 は調査区の東南部にある長方形の土壌である。深さは 0.7～1 m で、埋土はいずれもよく似た黄褐色粘土である。S D 3045 と重複する S K 3051 は東西 1.5 m、南北 2.0 m、深さ 0.4 m の土壌で、S K 3052 は一辺



出土土器実測図 (SD2281; 14~18, SD3030; 12・20・21・26~29, SD3031; 5・10・11, SD3035; 1・2・6~9・13・19, SD3045; 3・4・22~25, SD3043; 30)

2.0 m、深さ 0.5 m の方形の土壇である。いずれも東西・南北方向に走る中世小溝より新しい。遺物は少なく、その性格については不明である。

古墳時代前期の遺構 円形周溝 S X 2771、斜行大溝 S D 3040 がある。

S X 2771 は調査区の西南部にある径 15 m の半円形に巡る溝で、西半部は藤原宮の外濠に壊されている。溝幅は 1 ～ 1.5 m、深さは 0.05 ～ 0.5 m である。断面形は U 字形で、底は凹凸が著しい。溝内から庄内式土器が出土した。墳墓に関わる周溝と考えられる。S D 3040 は調査区の中央部を南西から北東に延びる幅約 6 m、深さ 1 m の斜行大溝である。調査区の北と南で一部を検出した。溝内の堆積土は 3 層に分かれ、最下層には多量の流水を示す厚い粗砂層がみられた。各層から庄内式土器を出土しており、最下層からは木製品も出土している。

出土遺物 土器、瓦、金属製品、木製品がある。藤原宮期の遺物は多くはない。瓦類はごく少量で、軒丸瓦が 2 型式 2 点、軒平瓦 4 型式 10 点と丸・平瓦が出土している。大半が灰褐色土層から出土したものである。組み合わせは第 29 次出土例と大差ない。土器類では、それぞれ余り多くないものの、飛鳥地域土器編年のⅢ・Ⅳ・Ⅴ期に比定される良好な資料が出土した。中でも、Ⅲ期に比定される溝 S D 3030・3045・3035 出土の土器群はややまとまっており、このうち、前二者が古い様相を示すなど、藤原宮造営以前の遺構の理解の上だけでなく、不明な点の多い当該期の資料として注目すべき内容を含んでいる。Ⅳ期に属する S D 3043 出土の大型円面硯（30）は、周辺の遺構の性格を示すものとして注目される。藤原宮以降の遺物では、S D 2281 の最下層から 9 世紀後半～10 世紀前半の土器が出土している。

まとめ 今回の調査は藤原宮の外周帯の様子を解明することを主な目的として行ったのであるが、藤原宮期だけでなく、7 世紀後半期の状況についても、ある程度の手がかりを得ることができた。以下、今次調査の成果と問題点を二、三指摘しておきたい。

東二坊大路の西側溝には南北溝 S D 2281 と、その西 6 m の位置にある南北溝 S D 3031 のいずれかが該当する可能性がある。従来の調査の知見によって、東面大垣から東二坊大路心までの距離を令大尺の 200 尺（約 71.2 m、1 尺≒35.6

cm)とすると、S D 2281を西側溝とみた場合、想定される東側溝との心々距離は約19.4mとなり、S D 3031では約20.4mに復原できる。宮の四周の大路については、宮南面の六条大路を一部確認しており、第21－2次調査（概報8）では側溝心々で19.8m、第29－6・7次調査（概報11）では17.3m、ないし20.8mという数値を得ている。S D 3031を西側溝とした場合、東二坊大路の幅員は六条大路の幅員と近似する。遺物からみると、S D 3031は藤原宮期の短期間に限定できるのに対し、S D 2281は10世紀まで存続する。これらのことを勘案して、ここではS D 3031を東二坊大路西側溝と考えておく。しかし、この問題についてはS D 2281の性格の解明も含め、周辺地域の調査の進展をまって改めて検討することにしたい。

東二坊大路と東面外濠との間の外周帯では、藤原宮期の建物はみられず、平坦に造成された広い空閑地であることが明らかになった。東面北門に近接する場所には仗舎とみられる掘立柱建物S B 2290があり、地点により状況を異にしていたようである。外周帯の利用状況については今後も計画的な発掘調査を進め、明らかにしていくことにしたい。

藤原宮以前の遺構が多数検出されたことは注目される。同時期の遺構はこれまで藤原宮とその周辺地域の各所で見つかっており、数時期に分かれることが確認されている。今次調査区の状況も同様で、出土遺物や整地層との関係から、各遺構の時期をある程度細かくとらえることができた。これらの遺構については、これまで一般集落と考えられていたが、今次調査例は7世紀後半から藤原宮期前に限定でき、一般集落とみるには問題がある。大型の円面硯も出土しており、建物群の性格の一端をうかがわせている。藤原宮以前の建物群の性格については、今後十分な検討が必要であろう。